

だんご四姉妹

旭川永嶺高等学校 二年 庄司 光愛

いつも怒っていて忙しそうな長姉、天然で周りを一切気にしないマイペースな次姉、一日中母にまわり付き、口を動かしている騒がしい妹。私はそんな姉妹の「間」に生まれた、冷静で愛情深い三女である。

一人の友人が「姉も妹もいて羨ましい。一人だつまらない。」と言った。幼稚園の頃から「こんな姉（兄）が欲しい。」「こんな妹（弟）が欲しい。」という言葉が耳にしてきた。周囲には一人っ子か、兄弟姉妹が一人だけという子が多かった。姉妹の「間」にいることが当然の私からすれば、それはとても新鮮でもあり、珍妙なことでもある。実際に「間」に生まれた私ならではのエピソードを紹介していこうと思う。

各自好きなように部屋でくつろいでいた時のことだ。「ここに置いてあったお菓子知らない？ 誰か食べたでしょ。」唐突に次姉が言った。私はちょうど勉強が終わって、楽しみにしていた本を読もうとしていた。心あたりがないと首をかしげていると、「食べちゃった。ごめん。」と軽い調子で謝る妹がいた。ここから言い争いが始まり、呆れていたところに妹の「みーこはどう思う？」という一言がきっかけで、私も巻き込まれてしまった。お菓子を取られたぐらいで怒る次姉もそうだが、素直に非を認めて謝らない妹も悪い。私はそう言ってなだめようとしたが、結局母が帰ってくるまでけんかは続いた。なぜ私まで争いに巻き込まれないのか、理不尽な現実に頭痛がした。毎度二人の「間」に立たされて、その都度仲裁しなければならぬ私の気持ちも察してほしいと思うのは贅沢な願いなのだろうか。

こんな話を母から聞いたことがある。まだ幼稚園に入ったばかりで小さかった私と次姉、妹の三人は、母に連れられ大型の商業施設に行った。長姉は私と八歳離れていたもので、幼い私たちの世話を手伝わされていたそう。そんな母や長姉をいつも困らせたのが、次姉と妹だ。そろいもそろってあちこち歩き回るせいで、二回に一回は迷子になりかけていたのである。片や、私はとても大人しく、手のかからない子であったそう。その結果、必然的にその場での待機を命じられた私は、母たちが忙しなく二人を追いかけ回す間、ひたすら待ち続けた。鬼ごっこの終盤、突如

私の事を思い出した母は、「ごめんね、ミーこ。ミーこのこと忘れてた。」そう、姉と妹の個性が強すぎるあまり、「間」の私はよく忘れられてしまう。これは、今日まで何度も経験している。大好きな人に一瞬でも忘れられてしまう悲しさや、恐怖とあったら！

一方で、私は、本当に孤独を感じたことがない。それは、どこにいても姉妹がずっと一緒だという安心感があるからだ。小学校や、中学校の入学時には、年子の次姉がすでに通っていて、新しい環境にもすぐ慣れることができた。姉が卒業したあとは、これまた年子の妹がまだ残っていたので、学校生活において一人になることはなかった。姉妹の「間」にすることは、私にとってはこのうえない安心感と、幸福感を与えてくれた。

先に述べたように、四姉妹の「間」の三女として生を受け、周囲から姉妹がいて羨ましいという声をたくさん聞いて育ってきた。正直姉妹がいることに誇りすら持っている。私たち姉妹は、他の人から見てもとても仲が良いらしい。これも姉妹「間」の繋がりが深く、絆が強いものであるからだと思う。さながら「だんご三兄弟」のようではないか。かなり前に流行った歌だが、私はこの歌が大好きだった。私は四姉妹であるので、一番上の妹思いのだんごは次姉。一番下のお姉ちゃん大好きだんごは妹。真ん中でつなぎとなるだんごが私である。長姉はどこへと思うだろうが、この三つのだんごのど真ん中をつらぬき、まとめる串が長姉なのだ！

しかしながら、これはあくまで理想である。実際のところ、面子を入れ替えいつも誰かはけんかをしている。どこの姉妹でも似たようなものだと思うが、うんざりすることも多い。もしも願いが叶うのならば、私は「間」という身分ではなく、一人っ子になりたい。一人っ子ならば、今よりも落ち着いた生活を送れ、母の愛を独り占めできたのではないだろうか。

隣の芝生は青いのである。